

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

まつぼうようほう こと

（末法要法の事）

新版
1872
〜
1875

うえのどのごへんじ まつぽうようほう こと

上野殿御返事（末法要法の事）

こうあんがんねん

がつ にち

さい

なんじようとときみつ

弘安元年（'78） 4月1日

57歳

南条時光

はくまいいつと

芋

いちだ

蒟

蒟

ごまい

おく

た

そうら

白米一斗・いも一駄・こんにやく五枚、わざと送り給ひ候

お

い了わんぬ。

いしかわのひようえのにゆうどうどの

姫

ごぜん

たびたびおん

なによりも、石河兵衛入道殿のひめ御前の、度々御

文

遣

さんがつ

じゅうし

ご夜

そうら

ふみをつかわしたりしが、三月の十四・五やげにて候いし

おん 文

よ

なか

見 そうら

やまい

ひと

やらん、御ふみありき。「この世の中をみ候に、病なき人

今 年

過

見

そうら

うえ

もこんねんなんどをすぐべしともみえ候わぬ上、もとより

やまい 者

そうら

急

そうら

最

後

病ものにて候が、すでにきゆうになりて候。さいごの

おん 文

書

そうら

果 無

御ふみなり」とかかれて候いしが、されば、ついにはかな

たま

くならせ給いぬるか。

りんじゅう

なむ あみだぶつ

もう

合

そうろうひと

ほとけ

臨終に南無阿弥陀仏と申しあわせて 候人は、仏の

きんげん

いちじょう

じゅうしじょう

ひと

われ

ぞん

そうら

金言なれば一定の往生とこそ人も我も存じ候え。しか

そうら

ほとけ

悔

返

れども、いかなることにてや候いけん、仏のくいかえさ

たま

しんじつ

あらわ

しょうじき

ほうべん

す

せ給いて、「いまだ真実を顕さず」「正直に方便を捨つ」

説

たま

そうろう

浅

そうろう

にちれん

もう

ととかせ給いて 候があさましく 候ぞ。これを日蓮が申

そうら

虚

ごと

上

空

にほんこく

怒

し候えば、「そら事、うわのそらなり」と日本国にはいから

そうろう

れ 候。

ほとけ しょうじょうきよう じつぽう ほとけ

これのみならず、仏の小乗経には「十方に仏なし。

いっさいしゅじよう ぶつしよう 説 そうら だいじょうきよう

一切衆生に仏性なし」ととかれて候えども、大乘経に

じつぽう ほとけ 説

は「十方に仏します。一切衆生に仏性あり」ととかれ

そうら 誰 しょうじょうきよう もち そうろう みな だいじょうきよう

て候えば、たれか小乗経を用い候。皆、大乘経を

しん そうら

こそ信じ候え。

不可思議 違 目 そうろう

これのみならず、ふかしぎのちがいめども候ぞかし。

ほけきよう しゃかぶつ いこんとう きようぎよう みな悔 返 打 破

法華経は、釈迦仏、已今当の経々を皆くいかえしうちやぶ

きようしんじつ 説 たま そうら みでし

りて、この経真実なりととかせ給いて候いしかば、御弟子

とうもち とき たほうぶつ しょうみよう 加 じつぽう

等用いることなし。その時、多宝仏、証明をくわえ、十方

しよぶつ した ぼんてん 付 たま

たほうぶつ

扉

閉

の諸仏、舌を梵天につけ給いき。さて、多宝仏はとびらをた

じつぽう

しよぶつ

ほんど

帰

たま

のち

て、十方の諸仏は本土にかえらせ給いて後は、いかなる

きようぎよう

ほけきよう

しやかぶつ

破

たも

たにん 和会

経々ありて法華経を釈迦仏やぶらせ給うとも、他人わえ

破

ほけきよう いご

きようぎよう

になりてやぶりがたし。しかれば、法華経已後の経々、

ふげんぎよう

ねはんぎようとう

ほけきよう

讃

普賢経・涅槃経等には、法華経をばほむることはあれども

謗

しんごんしゅう

ぜんむいとう

ぜんしゅう

そしることなし。しかるを、真言宗の善無畏等、禪宗の

ししとう

破

にほんこく

みな

しん

れい

師々等、これをやぶれり。日本国、皆このことを信じぬ。例

まさかど

さだとう

語

ひとびと

にほん

せば、将門・貞任などにかたらわれし人々のごとし。日本

こく

しやか

たほう

じつぽう

ほとけ

だいおんてき

すうねん

国すでに釈迦・多宝・十方の仏の大怨敵となりて数年にな

そら

漸

破

もう

もの

り候えば、ようやくやぶれゆくほどに、またこう申す者を

おん 怨

禍

禍

並

御あだみあり。わざわいにわざわいのならべるゆえに、こ

こくど

てん

責

被

そら

の国土すでに天のせめをかぼり候わんずるぞ。

ひと

せんぜ

しゆくごう

りんじゅう

この人は先世の宿業か、いかなることぞ、臨終に

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

いちげん

亀

う

南無妙法蓮華経と唱えさせ給いけることは、一眼のかめの浮

ぎ あな い

てん

くだ

糸

だいち

針

あな

い

き木の穴に入り、天より下すいとの大地のはりの穴に入るが

不思議

ごとし。あらふしぎ、あらふしぎ。

ねんぶつ

むけんじごく

お

もう

きようもん

また、念仏は無間地獄に墮つると申すことをば、経文に

ふんみよう

知

みなひと

にちれん

くち

い

分明なるをばしらずして、皆人、日蓮が口より出でたりと

思

もん

睫

もう

こくう

おもえり。「文はまつげのごとし」と申すはこれなり。虚空

とお

ちか

ひと見

あまごぜん

の遠きとまつげの近きと、人みることなきなり。この尼御前

にちれん

ほうもん

僻ごと

そうら

りんじゅう

は、日蓮が法門だにもひが事に候わば、よも臨終には

しょうねん

じゅう

そうら

正念には住し候わじ。

にちれん

でしとう

なか

ほうもん知

また、日蓮が弟子等の中に、なかなか法門しりたりげに

そうろうひとびと

悪

そうろう

そうろう

なんみようほうれんげきよう

もう

候人々は、あしく候げに候。南無妙法蓮華經と申すは、

ほけきよう

なか

かんじん

ひと

なか

たましい

法華經の中の肝心、人の中の神のごとし。これにものを

並

后

におう

夫

ないし

ならぶれば、きさきのならべて二王をおとことし、乃至、

后

だいじんいげ

内

々

嫁

禍

きさきの大臣已下にないないとつぐがごとし。わざわいの

源

しょうほう

ぞうほう

ほうもん

弘

よきよう

みなもとなり。正法・像法にはこの法門をひろめず。余経

うしな

いま まつぼう

い

よきよう

ほけきよう

を失わじがためなり。今、末法に入りぬれば、余経も法華経

栓

なんみようほうれんげきよう

もう

い

もせんなし、ただ南無妙法蓮華経なるべし。こう申し出だし

そうろう

私

はか

しゃか

たほう

じつぼう

て候もわたくしの計らいにはあらず、釈迦・多宝・十方

しよぶつ

じゆせんがい

おんはか

なんみようほうれんげきよう

よじ

諸仏・地涌千界の御計らいなり。この南無妙法蓮華経に余事

雑

僻

ひい

灯

をまじえば、ゆゆしきひが事なり。日出でぬれば、とぼしび

栓

あめ

降

つゆ

栓

みどりご

ちち

せんなし。雨のふるに、露なにのせんかあるべき。嬰兒に乳

ほか

養

りようやく

くすり

くわ

より外のものをやしなうべきか。良薬にまた薬を加えた

ることなし。

によにん

この女人は、なにとなけれども、自然じねんにこの義ぎにあたり

果

尊

きようきようきんげん

て、しおおせぬるなり。とうとし、とうとし。恐々きようきようきんげん謹言。

こうあんがんねんしがつついたち

弘安元年四月一日

日蓮 花押

にちれん かおう

うえのどのごへんじ

上野殿御返事